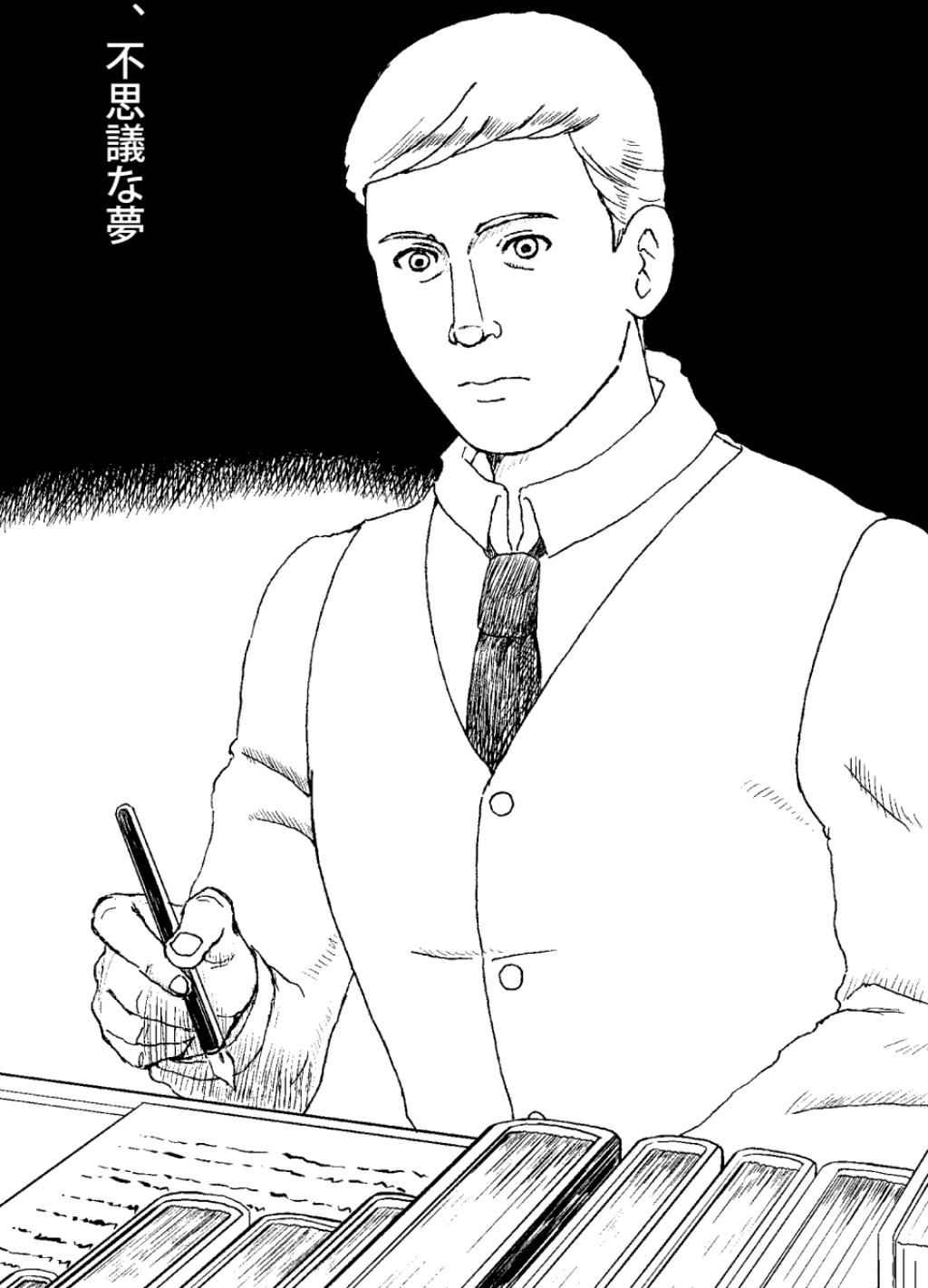




前編

叔父さんの住む靈界

一、不思議な夢



一九一四年一月五日、月曜日、ワード氏の叔父さんは、八十才の誕生日を迎えたその日に亡くなりました。

実は、その一ヵ月前に、ワード氏は叔父さんの亡くなる夢を、ありありと見たのでした。それは叔父さんの臨終から、お葬式の模様、それに、自分自身が式に参列している姿まで、はつきり見えたのでした。その時の悲しい気持、また、お悔みに来た人達の表情や言葉まで、はつきりと胸にきざみつけられて、覚めてからも消えないのです。

で、そのことを妻のカーリーに話すと、ではすぐロンドンへ行つてみましょう、ということになつたのですが、あいにく、カーリーが急病になつたので、どうとう行けないままになつていきました。

ですから、一月五日の朝、叔父さんの死の知らせを受けると、ワード夫妻はどるものもとりあえず、ロンドンへ急ぎました。

でも、ロンドンへ着いたワード氏は、何もかもびっくりすることばかりでした。実は、お葬式の模様といい、集つた人達の顔ぶれや、挨拶の仕方といい、それに棺に眠つてい

る叔父さんの顔付きまで、夢で見たのとそつくりだつたのです。

あまりのショックに、ワード氏はそれから何日も悲しい日を送りました。

ところが、叔父さんの死から一週間目、一月十二日の月曜日、夕方のこと、たまたま母のカーリーと庭に出ていた、五才になる娘のエディーが、急にこんなことを口ばしりました。

「あれ、あんな所におじい様が、ほれ、いつもの黒いズキンをかぶつて。あ、こっちはふわふわ降りて来るわ。」

「アラ、ご機嫌ようだなんて、おかしいわ。ホレホレ、もうあんな所で、おじい様つたら、お星様をまちがえて、お花のように摘んでいるわ。」

これは、きっと熱のせいだ、とカーリーは思つて、エディーを部屋につれていつて寝かせました。

ところが、その夜のことです。ワード氏は不思議な夢を見ました。急に、寝室の中がほの明るくなつたと思うと、叔父さんの顔が現われました。それは生きてる時の顔と似

ているのですが、どこか違う。そう、生顔と死顔をちゃんとにして、一一で割ったような顔です。その叔父さんが口をひらいて、こう言うのです。

「初めは、娘のカーリーに通信しようと、やつてみたのだが、あれは鈍感でいつも駄目だ。孫のエディーには見えとつたようじゃが、あ、小さくては役にたたん。で、こんどはお前に試してみたんじゃが、お前はテレパシー能力があるとみえて、これこの通り大成功じゃ。」

叔父さんは、嬉しそうにニッコリしました。

「では、夕方、エディーがおじい様を見たと言つたのは、本当だつたのですか。お星さまを集めて、花束にしていると言つたのは。」

「そうじや、わしじや、本当じや。じやが、星を摘んだのではない。花じや、靈界の花は、星のようにきれいだから、うつかりエディーは見違えたのじやろう。」

「で、叔父さん、貴方は今何処に居られるのです。その靈界とやら、ですか。」

「そうじや、そうじや。これこの通り、わしは靈界でピンピンしておるわい。」

そう言うと、叔父さんの顔は、心なしか、生前より若やいで、生き生きと見えました。「で、そのことじや、人は死んでも死なぬということじや。わしはこっちの世界へ引越して、初めてそれを知った。で、その喜びを、お前達にも分けてやろうと思つてな。そうじや、わしの葬式の日に、お前もカーリーも、すつかりしおれていたな。カーリーのやつ、わしの死に顔を見て、オイオイ泣き出しあつて。そうしたら、お前はハンカチをとり出して、カーリーの手に持たせてやつたな。」

「オヤ、叔父さんは、なぜ、そのことをご存じなのですか。」

「それ、それが、わしが生きておる何よりの証拠じや。わしとは、ホレ、今ここに居るこれがわしじや。死体は、いわば、わしの脱け殻じや。」

「では、カーリーは、その脱け殻に、涙をこぼしておられたわけですか。」

「さよう。それが不憫でな。いや、おかしくもあるし。わしはそばに立つていて、やきもきしたもんじや。」

「すると、叔父さんは、お葬式の日のことは、何もかも見ておられたのですか。」

「そう、何もかもじや。それに、わしはわしの臨終についても、見て何もかも承知している。いや、それについては、またゆつくり話すとしよう。ともあれ、今日は、お前と通信ができて、まことに満足じや。では、次の月曜日を待つていておくれ。それがわしの誕生日で、また命日じやからな。」

それから、ワード氏はぐつすり眠りにおちたのか、翌朝は、いつものように目が覚めました。でも、頭には昨晩のことが、まざまざと焼き付けられていて、いつまでも忘れられませんでした。